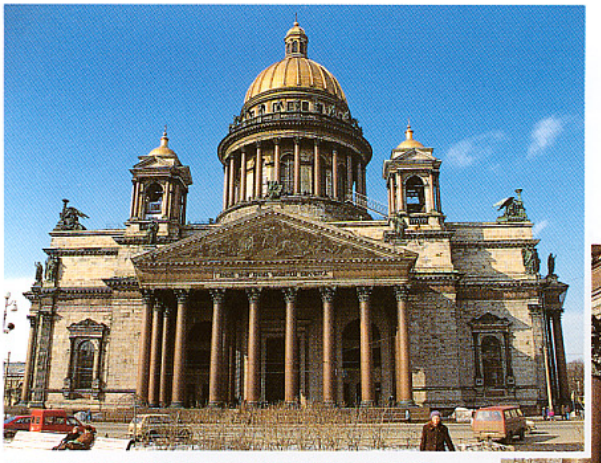
サンクト・ペテルブルクの花崗岩石材

バルト海にそそぐネヴァ河のほとりに18世紀初め築かれたサンクト・ペテルブルク(旧レニングラード)は，以来200年余り帝政ロシアの首都として栄え，そして社会主義革命の舞台ともなった．ネフスキー大通りには19世紀中葉の町並みがそのまま残され，石材を用いた重厚な建築物が，モスクワとは違った独特の雰囲気を感じさせる．ここに示す赤色石材は，15億年余り前バルト楯状地に貫入したラパキビ(Rapakivi)花崗岩で，北西方のVyborg岩体などから運ばれてきたものである．

＜地質調査所 鉱物資源部　佐藤興平＞

1．エルミタージュ美術館前の王宮広場に立つアレクサンドルの花崗岩円柱(高さ47.5m)．1812年の対ナポレオン戦勝利を記念して1830-34年に建設．美術館(革命前の皇帝の居城=冬宮，1754-62年建設)3階より撮影．背景は旧参謀本部(1819-29年建設)．広場は1905年の「血の日曜日」事件でも有名．右上は円柱の台座部分に見られるラパキビ構造(卵形のカリ長石斑晶を薄い斜長石が囲む．写真の左右50cm)．



2．イサーク聖堂正面(左上)のラパキビ花崗岩の円柱．現在の聖堂は，フランス人建築家の設計で，1818年から40年かけて建設され1858年に完成．建物の4面と円屋根の支柱に巨大な花崗岩円柱が使われ，内装の孔雀石や大理石などと共に，当時の教会の権勢を今に伝える．広角レンズ使用．

3．芸術広場のプーシキン像(1975年設立)．この台座もラパキビ花崗岩．背景はロシア美術館(1825年ミハイロフ宮殿として完成，1898年から美術館)．